

最終日は文献の紹介に続いて新山先生がお持ちになった藍藻を観察した。おなじみのアオコのほか、一見同じような糸状体にしか見えない2種がよくよく見ると一方には異質細胞があつて別の科や別の種類であるという例など。要は、多くの個体を見てよく観察しなさいということだ。このことは同定する上での基本であるが、通常の業務では時間が無くてつい12個体を見ただけで種名を決めてしまったりもする。これが誤同定につながるのだ。初心に帰らねば。最後に一人一人が感想を述べた。本ワークショップが大変有意義であつたことを印象付ける意見が多かつた一方、学生さんにはやや難しい面もあつたようだ。だが、これをきっかけにして将来藻類の研究者が輩出されることを願う。

今回、当たり前なことなのだが藻類は「生き物」であるということ再認識した。ともすれば私たち分析業者はホルマリン固定されたサンプルを生息環境も知らぬまま機械的に同定してしまいがちだ。しかしそれではごく一面的な情報しか得られない。まず

藻類の生きた姿を見ること、そして生物観察の基本である、いつ・どこで・どんな環境で生活を営んでいるのかを知ることが大切だということを実感した。お三人の先生方からは始終「藻類に対して愛情を持って接しなさい」とのメッセージが寄せられているように感じたが、こう感じたのは私一人ではないと思う。

本ワークショップを終えて、その充実した内容と多くの情報を得られたことに大変満足であつた。しかしまだ学びたい藻類は山ほどある。ぜひこの続きの開催をお願いしたい。ただ開催時期については、今回は年度末の多忙期と重なり、アセスメント会社の方の参加が少なく残念であつた。その辺りをご一考願えればと思う。

最後に、ワークショップの講師を務めていただいた先生方、整った設備を提供・ご準備くださった東邦大学のスタッフの皆様をはじめ企画・準備・運営にご尽力くださった皆様に心より感謝申し上げます。

(個人分析業)

公開講演会について 宮田昌彦¹・宮地和幸²

公開講演会「ちば・知られざる藻類の世界発見～多様性と絶滅、そして日本の味～」は、日本藻類学会第38回大会(船橋2014)の最終日、3月16日(10:00～12:30)、東邦大学薬学部C棟・C101講義室にて東邦大学理学部と共催で開催した。講演会は、学会参加者(会員)、学生、市民合わせて68名の聴衆を得て好評であつた(図1)。講演会は、房総半島沿岸の海藻の種の多様性が極めて高く、また、半島北部の利根川沿いの湖沼群と九十九里平野の湿地には淡水藻類(特にシャジクモ類)の多様性が高いこと、そして、東京湾東部沿岸において“江戸前”の海苔の養殖が盛んにおこなわれていることから講演会の題名が提案された。講演者は、鈴木雅大氏(東京大学・院理・生物科学)「房総半島に生きる海藻たち～黒潮と親潮に育まれた命～」、佐野郷美氏(千葉県立船橋芝山高校)「シャジクモ(車軸藻)を求めて40年～絶滅危惧種の保全と復活に取り組む～」、林俊裕氏(千葉県水産総合研究センター東京湾漁業研究所)「江戸前の海苔養殖～旨い海苔づくり今昔～」であつた(図2)。また、開場入り口でおこなつた、講演に関連する千葉県固有種・オオノアナメなどの証拠標本の展示は好評であつた。今回の公開講

演会を企画・運営し、また聴衆からの意見を踏まえると、題名と講演内容があまり難しくなく、中学生程度を対象としたもので、地域の話題について紹介することが求められていると総括した。

(¹千葉県立中央博物館, ²東邦大学)



図1. 公開講演会・開場と聴衆



図2. 講演者(左から林氏, 佐野氏, 鈴木氏)